

■令和6年度 第1回こどもの居場所づくり検討部会議委員意見概要

日時:令和6年7月 29 日(月) 15 時 30 分から 17 時

場所:本庁舎 2階 201 会議室

出席委員:大竹委員、染谷委員、中原委員、大松委員、今井委員、政木委員、酒井委員、森岡委員 8名

<意見交換内容>

委員	意見
大竹 部会長	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の館(やかた)としてそこにあり続けるのが児童館である。虐待予防など、相談になる前の普段の会話から課題を拾い上げる対応が児童館に期待できるのではないか。 ・こどもの意見の尊重が重要。意見聴取の結果を、どう反映させるかを検討し、反映だけでなくフィードバックも重要である。 ・こどもの意見は普段のこどもたちのやり取りの中で、こどもの本当の声をキャッチすることが重要である。 ・こどもの声を聴くだけでなく、こども自身が考え、意見を言えるような形成支援が必要である。 ・こどもたちは、これまでは支援される側だったが、児童館の中で支援する側に回れることもある。 ・こどもの権利について、職員の教育を含め、こども、保護者、地域の人々に伝える学習の機会をつくる必要がある。 ・災害時への対応は、友好都市と協定締結等、他自治体との連携があるとよい。 ・自分のところで全部解決できるということではなく、それぞれの社会資源を有効に活用して問題解決できるような、そのような方向性は、まさにソーシャルワークの視点である。児童館が全て問題解決するのではなく、区が持っている社会資源や、民間も含めて、この大田区にどのような社会資源があるのかをもう一度棚卸しをし、問題を解決するために、ネットワークを作って支援していくとよい。 ・大田区では、地域の中の児童館というのも今後、キーステーション、拠点になっていろいろな社会資源と繋がりを持って解決できるような機関になると思う。それは社会福祉協議会という専門機関とのネットワーク、あるいは、地域住民である民生児童委員や主任児童委員とのつながりも含め、さらに言えばこどもというところでいくと、地元にある小学校、学校教育とのつながりも重要になってくる。 ・すべての児童館が同じではなく地域の特性を生かした機能強化をしていくことになるだろう。 ・ネット空間の居場所もあるが、こどもは、まずは対面の居場所が重要である。

委員	意見
染谷 副部長	<ul style="list-style-type: none"> ・児童館は、学童までというイメージになっているので、そのイメージを払拭しない限り、児童館で「中高生も遊べる、勉強できる」と言われても「中高生になってもまだ児童館に行くの？」のようなイメージを持ってしまう。いかに児童館へ足を運んでもらえるような体制を整えるかが一番の課題だと思う。 ・今も児童館の PR をしていると思うが、選択肢があることをもっと積極的に PR したほうが良いと思う。また、今はネットだけが独り歩きをしているところがあるので、親御さん同士の会話、児童館の先生方との会話の中で、自分たちでも情報を収集できるような体制を整える機会を設けて欲しいと思う。
中原委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で辛い思いをしているこども、或いは子育てに悩んでいらっしゃる方を含めて、「誰もが行ける、つぶやける」居場所としての児童館が必要だと思う。 ・地域の居場所としての地域性や相談のきっかけになるような多機性、地域の中での拠点性があるとよい。そのためには職員の専門性が重要であり、ソーシャルワークを担う職員の配置・育成が必要になる。 ・児童館とこども食堂が敷居の低い相談支援の場を担っていくことで、交流の中から相談も生まれてくる。特に中高生は、夜間なども開いている等の必要性もあると思う。 ・児童館は、外国にルーツがあるこどもや障がいがあるこども、子育てする保護者の等の相談など、インクルーシブな場としてより多様な機能(対応、相談支援など)が求められている。 ・こどもの権利の尊重、参加の権利にもあるように、こどもたちはこれまでは支援される側だったが、今度は年齢の高いこどもが年齢の低いこどもの面倒を見るという支援する側に回るということも視野に入れ、ボランティアの育成・確保や福祉教育という視点で社会福祉協議会とタイアップする必要もあると考える。 ・児童館は様々な問題に対応できる伴走支援の場になれると考えている。 ・児童館に居れば何かができる、という地域の拠点、そこに相談の入り口もあるという多機能性のある地域の居場所となる。 ・児童館にソーシャルワーク機能を持った専門性のある職員の育成と配置が必要ではないかと思う。 ・他の部局や学校との連携、行政と民間の連携が必要になる。 ・他部局(こども若者総合相談センター等も含めて)や民間、地域との連携も視野にいれる必要がある。

委員	意見
中原委員	<ul style="list-style-type: none"> ・児童館の強み(歴史や知名度)と弱みを分析し、強みをいかしながら、他の地域資源(社協、ボランティアセンター、民生児童委員等)と連携できる方法を模索するとよい。 ・社会資源を有効活用しながら、児童館もその一つとしてソーシャルワークを担っていくことになる。地域資源の棚卸をし、ネットワークを形成する必要がある。 ・こども食堂と児童館の連携、ボランティア確保のための社会福祉協議会との連携などを検討する。
大松委員	<ul style="list-style-type: none"> ・中高生のための利用時間の拡大、特に夜間の利用拡大が必要ではないか。 ・年齢ごとに必要な機能が異なるため、全年齢対応は難しいのではないか。中高生が求める機能が充実した館が複数あるとよい。 ・小学生が歩いて行ける距離、ベビーカーを押して来られるくらいの距離だと、小学校区に一つくらいの児童館があってほしいと考える。 ・中高生は施設数が少ない中でも機能が充実した施設があれば、多少遠くても、必要な機能の場所へ自転車や電車でも行くことができるので、施設数は少なくても問題はないと思う。また、親の相談機能として夜間や日曜日についても、ある程度足を運べる場所があると安心と考える。 ・開館時間が9時～17時だと利用者が限定されるため、夜や土日も空いており、いつも誰かいてくれる場所という安心感を提供できるとよい。
政木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルワーク機能の強化というのは、とても大事なところだと思う。福祉の観点からも、地域の様々なこどもが気軽に立ち寄って、相談や、その先の適したところに結びつくようなものがあればよいと思う。そのためには、もっと、身近に児童館を感じていただく必要があると思う。 ・老朽化していく施設をそのまま確保していくか、ソフトの整備検討も大事であるが、他区のあり様も踏まえ、基幹児童館、それに基づく地域の児童館の役割と両方併せ持つ部分もしっかり検討する必要がある。
今井委員	<ul style="list-style-type: none"> ・行きたくても行けない家庭へのアプローチや広報活動、体制づくりが必要ではないか。 ・大田区において不登校特例校を準備中だが、学校以外の居場所や学校に行きづらいこどもの居場所としての児童館の機能も考えるべきである。校外の場所でも地域の方と連携しながら考えていく必要がある。 ・児童館を利用するこどもはどのようなこどもなのか、児童館に来たいというこどものニーズはどのようなものだろうか。今後の児童館及びこどもの居場所のあり方を検討する上では分析する必要があると思う。 ・子ども若者総合相談センターがあり今後の居場所づくりの中で、連携していく必要があると考える。

委員	意見
酒井委員	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時におけるこどもの居場所としての具体的な役割の検討が重要である。 ・児童館でのいろいろな遊びの中での話から、いろいろな普段の生活の話を引き上げることができる。児童館のこどもたちが過ごす場の相談機能として、どうやってこどもたちの安全のセーフティーネットを張っていくかというところも大きな視点だと思う。そういった意味でも、児童館側にもソーシャルワークを担えるような人材の配置なども含めて、どのような仕組みを作っていくかについて進めていかなければならないと思っている。
森岡委員	<ul style="list-style-type: none"> ・児童館に求められる機能は増えている。時代も変わっている中でもう一度立ち止まって、児童館を今後どうしていくのか、平成 28 年度に出した方向性について、そのままでもいいのか、改めて深くする機能はあるのか検討したい。 ・建物の老朽化の対応として機能特化していく、また地域の特色を生かしたものも考えていく。